

## 優しさの感覚

(原文)

日下部 結人 (14 歳)

神奈川県

慶應義塾普通部

先日、旅行でハワイに行った。海、プールで遊び、国立公園にも出かけた。次の日の朝食を買おうとスーパーマーケットに行った。スパムむすびと一緒に大好きな「アリゾナ」という飲みものを箱で購入しようとレジへ向かった。レジには、小柄な僕よりはるかに小さい男性の店員さんがいた。僕はレジの機械の横で、お金を支払う準備をしていると、難しそうに箱と奮闘している彼の姿が目にとまった。そこで北は気づいた。彼には下半身がない。そして、電動の車いすに乗っている。それに気づいた瞬間、僕はかけより、箱を動かすのを手助けした。障害に気づいてあげられなかったお詫びの気持ちから、自然と「sorry.」と言っていた。すると「Don't worry. Thank you for your help.」と満面の笑みで言われた。僕は障害に気づけず、あんな大きな箱を彼に任せて嫌な思いをさせたのではないかという自分自身へのいらだちと同時に、なぜ彼はあんなにもキラキラした目の笑顔だったんだろうという疑問を胸にホテルへと戻った。後日、服などを売ってるお店に行った。そのお店はたくさんの人で混雑しており、品出しが次々に行われていた。その品出しをしている一人の店員さんの姿に僕は固まった。その人には片腕がなかった。片腕の代わりにワゴンのポールや時には顔と肩でハンガーをはさむ動作をしながら作業をテキパキと進めていた。ハワイの地では体に障害がある人が「普通」に働いていた。

日本ではどうだろうか。電童車いすの人が大きな荷物を動かさなければならない仕事に就くことや、片方の腕がない方があえて腕をフルに使うことが必要な仕事に就くだろうか。あまり動く必要のないデスクワークをすすめられたり、障害を気にせず働ける職場環境を作ることが優しさだと考えられるのではないだろうか。それが日本の「感覚」だ。日本で、障害を持っている方への「優しさ」といえば、様々なことが思い浮かぶ。電車で席を譲る。荷物を持ってあげる。何か困っていないか聞いてあげるなどだ。障害がある方に特別な意識を向けること、もっといえば意識を向けてあげることが、日本流の優しさだと考えられるのではないか。

海外での体験を通して、障害を持つ方に対し特別の意識を持つこと、特別扱いすることのみが「優しさ」ではないと強く感じた。人はみんな充実した時を生きる権利を持っている。自分の望むことを出来ることが幸せだと感じるのは誰もが一緒だ。その幸せへのお手伝いをするところこそが、「優しさ」ではないのか。身体に障害がある、なしにかかわらず、誰もが「優しさ」によって幸せを感じる事ができるのだと身を感じる出来事があった。

後日、もう一度彼女が品出しをするお店に行ったときのことだ。あの店員さんは同じ階で品出しをしていた。カッコいいTシャツを見つけた僕は英語でたくさんの文字がかかれた大きな札をじっと見つめながら、半分途方に暮れながら悩んでいた。すると、その店員さんが寄ってきて「Good!」とにっこりとした。そしてすぐに片方の手だけで器用にTシャツを裏返し、「Good!」と満面の笑みで言った。そのTシャツは表でも裏でも着られる面白いTシャツだったのだ。英語に苦戦する僕は彼女の「優しさ」に助けられ、幸せを感じた。

僕が海外で出会った二人の店員さんたちに共通すること。それはとても素敵な、輝くような笑顔で仕事をしていたということだ。それはきっと、障害があるからという特別扱いもされず、「優しさ」に囲まれて、自分の望む仕事ができる幸せを感じているからだろう。